

学生奮闘記

奄美群島での魚類の研究—新種の発見や魚類リストの作成—

藤原恭司（鹿児島大学連合農学研究科）

私は魚類分類学を専門としており、特に細長い体型で、腹部に発達した吸盤をもつウバウオ科の仲間の分類をテーマとしている。このグループは漁業などでは採れず、また水揚げもされないため、自身で採集を行い、研究に用いる標本作製する必要がある。私は特に分類学的に問題を抱えていた熱帯～亜熱帯域に生息するウバウオを採集するために奄美群島の離島でダイビングを用いた調査を実施した。

これまでの調査の内、特に大きな成果があった沖永良部島での調査を紹介する。この調査では、ウバウオの中でも棘皮動物のウミシダ類に吸着する特異な生態をもち、詳細な調査が求められていたタスジウミシダウバウオとよばれるウバウオ（写真 1）を採集することを目的とした。このウバウオはダイビングとしてはやや深場であつ、よく流れがあたる場所に生息するウミシダの中に隠れて生活するため、これまでほとんど標本個体が得られていなかった。調査では、なかなかターゲットを見つけることが出来ず、苦戦した場面もあったが、地元のダイビングショップの方々などと協力関係を築くことができ、最終的には研究に必要な個体を私自身で採集でき、大変うれしかった。研究の成果としては、このタスジウミシダウバウオには一致する学名がないことが判明し、2021 年の 10 月に新種、*Lepadichthys geminus* Fujiwara & Motomura 2021 として国際誌に発表することが出来た。さらに、この調査では、これまで見たこともないウバウオ（写真 1）も採集することが出来た。これは現在、未記載属・種（新分類群として公表される前の呼び方）と考えられ、研究を続けている。

私の所属研究室では魚類の分類以外にも鹿児島県の離島を中心に、どんな魚がどこに生息しているか（魚類相）を明らかにする研究も実施している。この一環として、私は喜界島の魚類相を明らかにする研究に取り組んだ。魚類相の研究では、上記のようにあるターゲットのみを狙うというものとは正反対で、いろいろな環境を幅広く調査し、様々な魚類を採集するということが重要であり、同じ島での調査でも特色が大きく異なる。私はその調査の計画立案・指揮なども経験することが出来、慣れながらも、地元の方々を含め多くの協力をいただき、充実した調査にすることが出来た。これらの調査の成果は、さらに喜界島の魚類リストとして取りまとめるところまで漕ぎつくことができた。今後は、撮影した魚の写真を用いて、喜界島の魚類ポスターを作成したいと考えている。

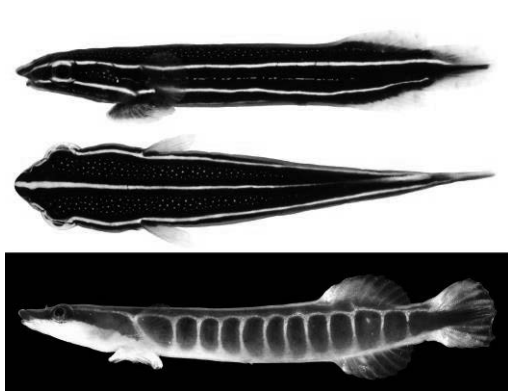


写真 1：沖永良部島調査で採集されたウバウオ科魚類（写真上と真中：タスジウミシダウバウオ *Lepadichthys geminus*; 写真下：未記載属・種と考えられるウバウオ）全て鹿児島大学総合研究博物館所蔵



写真 2：喜界島での調査風景
（写真に写っている人物は筆者）